

平成 22 年 4 月 17 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム
平成 22 年 第 4 回講話

恒例の質問

昨日一日、朝起きてから寝るまでの間、嘘をつかなかった方？

(・・・沢山手が拳がる)

昨日一日、良い日だったなと思う方？

(・・・沢山手が拳がる)

昨日一日で、有難うと言ひ、有難うと言われた方？

(・・・沢山手が拳がる)

皆さん順調ですね。ずっと手が拳がりました。

金子みすゞの詩

今回はホッとするものを付けました。レジュメに金子みすゞの詩がありますので、ご一緒に読んでみましょう。

(「私と小鳥と鈴と」と「繭とお墓」を音読)

「繭とお墓」の最後の部分、「そしていい子は翅が生え 天使になって飛べるのよ」が私は好きでして、ここを読むとホッとします。自分の背中に翅が生えて、飛んでいくようなイメージが浮かんできます。詩を読んで何か心がホッとして和むような、そういう時間をどこかで作ると良いですね。それには金子みすゞは良いと思っていますので、ご紹介しました。

金子みすゞは明治 36 年に生まれて、26 歳で自殺をしました。非常に良い詩を沢山創りましたが、彼女の詩は世の中に散逸し長らく忘れられてしまっていました。金子みすゞが亡くなって大分経ってから、関係者の努力によって遺稿集が発掘されブームになりました。

以前も申し上げたかと思いますが、私はたまたま本屋さんで金子みすゞの詩の文庫本を見て立ち読みしました。凄いなと思って買って帰って読みましたら、矢も楯もたまらず、金子みすゞの生まれた山口県の仙崎という所に家内と出かけました。何か氣になった時に、

どうしてもと思ったら、時間をやり繰りして行けるものだと思います。金子みすゞの生まれ故郷に行きましたら、すぐ近くに吉田松陰のお墓や松下村塾の址があって、思わず訪ねることが出来ました。嬉しいおまけがありました。

私は金子みすゞという言葉を知りだけで、何かホッとします。これから世の中はどんどん荒みますから、そういう時にホッとするものが欲しいと思って、金子みすゞの詩をご紹介します。

論語から今を見る

本日の論語の素読は、公治長第五 19～25 です。

【十九】 き ぶん し み おも のち おこな し これ き いわ ふた た こ か 季文子、三たび思おもいて後のちに行おこなう。子し之これを聞ききて曰いわく、再ふたびせたば斯これ可かなり。

魯の国の宰相の季文子は三回考えてから行動した。これを聞いた孔子が、「何か決断して実行するのなら、二回考えれば充分だ」と言った。

三回というのは、沢山という意味があります。ですから、三たび思うとは、優柔不断でものをあまり突き詰めないということです。

季文子は非常に慎重な性格でした。魯の国の国使として晋の国に出かけようとする時に、晋の君主の襄公が相当重い病にかかっていることが分かって、喪服を準備して出かけて行ったら、案の定襄公のお葬式だった。それを周りの人が見て、そこまで用意しなくても良いではないかと言われたという背景があります。孔子は何か決断する時は、一回目で考えて二回目で決断すれば良いと、この季文子に対して評価をしたと伝わっています。

あまりくよくよ考えない方が良いですね。

【二十】 し いわ ねいぶ し く に みち あ すなわ ち く に みち な すなわ く そ 子曰く、甯武子、邦道有れば則ち知なり。邦道無ければ則ち愚なり。其の知には及ぶべきなり。其の愚には及ぶべからざるなり。

甯武子は衛という国の家老です。

孔子が言うには、甯武子は国が治まっている時は素晴らしい能力を発揮するし、国が乱れてきたら愚か者を装う。その知恵者ぶりは真似ができるけれども、愚か者の真似はなかなかできない。

論語はその文章だけを見て、その文章の解説だけをしたのでは方手落ちです。論語の文

章を読んで、現代に置き換えて考える、自分のことに置き換える作業をしないと、なかなか沁み込んで来ません。

この文章を読んで、竹中平蔵さんを思い浮かべました。小泉さんとコンビを組んで郵政改革を進めました。一回退いたのですから何も言わなければ良いのですが、自分のやった改革がどんどん亀井静香さんにひっくり返されるものだから、腹が立って、最近はテレビに出たり、新聞に投稿して反論しています。しかし犬の遠吠えになっていると感じます。

小泉さんと竹中さんのコンビについては、私は唯一つの科白で、良くなかったと言い切ります。国債を発行するのに、公約した金額が守れなかった。その時に小泉さんは、「この程度の公約は、守れなくても大したことはない」と言いました。この発言で、すべて私は崩れたと感じました。中斎塾では、「嘘はつかない・約束は守る」とずっと言い続けていますし、自分自身の信条になっています。何ということをする総理大臣かと思いました。その小泉さんと一緒に進めた郵政改革も評価できません。

甯武子は国が治まっている時は知恵を出し、国が乱れていたら愚か者を装うという部分で、今の日本の国は、まだぎりぎりでは治まっている。これから乱れます。乱れた時に知恵を出そうとしても、知恵は受け付けない国になります。どういう風に愚か者の振りをするかは、ご自分でお考え戴きたいと思います。

【二十一】 し ちん あ いわ かえ かえ わがとう しょうし きょうかん ひぜん 子 陳に在りて曰く、帰らんか、帰らんか。吾党の小子 狂簡なり。斐然
しょう な これ さい ゆえん し として 章を成せども、之を裁する所以を知らず。

孔子が陳の国に滞在している時に言いました。「帰ろう。帰ろう。我が故郷へ。故郷の若者達は志は大きいけれども行動は片寄っている。困ったものだ。色彩豊かな美しい模様の衣服は、作り方を習っていれば出来るけれども、我が故郷の若者達は作り方を知らない。」

色々な国を回って自分の考え方を採用して貰い、自分の主義主張や理想をその国で実行したいと思って諸国を歴訪したけれども、誰も私を採用しなかった。だんだん年をとって、体力も衰えたと感じた孔子が、自分の故郷の若者を育てて、自分の考え方を後世の若者に残そうと思った。故郷の若者達は、志はあるけれども方法が分からないので、私が故郷へ帰って、人物になる方法を教えなければいけない。それが私の天から与えられた仕事（天命）だと考えて故郷へ帰ったということです。

荻生徂徠は「ここで孔子は天命を知ったのだ」と書いています。

今の時代で当てはめれば、50代は旬です。騙し騙し使えば、60代はなんとかなる。70代になると、騙し騙し使ってもどうにもならない部分がかかり出ます。自分自身の生涯で、やらねばならないものを決めるのはいつか。早く決められれば、それに越した事はないと思います。第一の人生の中で出来れば素晴らしいし、出来なければ、第二の人生で、自分の使命はこれだと思つたならばそれに向って全力投球すると良い。そのようにこの文章を読めばよろしいでしょう。

【二十二】 しいわ 子曰く、はくい 伯夷・しゅくせい 叔斉は きゅうあく 旧悪を おも 念わず。うらみここ 怨是を もつ 用て まれ 希なり。

孔子が言うには、伯夷・叔斉は悪いことをしても、その人が良いことをしたら、昔の悪いことは思い出さない。なので、他人から恨まれることは稀である。

伯夷・叔斉は兄弟です。孤竹という国で、次の君子をお互いに譲り合って、二人とも位を継がなかった。殷の紂王に仕えたけれども悪政にあきれてすぐに辞めて、周の武王に仕えました。その後、周が紂王を討って天下を取ったので、自分の志と違う動きがどんどん起ってくることに嫌気が差して隠棲をしました。自分を認めない所からの禄は食まないという意志で、蕨を取って命を繋いでいたけれども、餓死をしてしまったそうです。

日本でも終戦直後は、どの店に行っても食糧を売ってもらえない時がありました。国が配給するものだけでは足りないから、ヤミ米を買って飢えを凌いだわけです。私の学生時代の同級生の父親は裁判官で、ヤミ米は法律違反だからという理由で配給米だけを食べて、結局餓死をしてしまいました。後に残った家族は大変だったようです。戦後の日本でも、自分の主義主張を貫くために餓死をするような人がいたのです。

今は、伯夷・叔斉のような人はなかなかいませんね。

論語に「吾十有五にして学に志す。・・・七十にして心の欲する所に従いて、矩を踰えず。」とあります。80代、90代の心構えについては、宇野哲人先生や諸橋轍次先生が一致して言われたのは、「送らず迎えず応じて蔵せず」という言葉です。昨日のことはくよくよしない、明日のことは取り越し苦労をしない、今日あることを自然体で処理していけば良いということです。素直に、自然体で毎日を過ごせばよいというのが80代90代の心構えのようです。そうすると他人さまから恨まれることもまず無いでしょう。

【二十三】 しいわ たれ びせいこう ちよく い ある す こ これ そ となり こ子曰く、孰か微生高を直なりと謂う。或ひと醯を乞う。諸を其の鄰に乞いて之に与う。
これ あた

孔子が言うには、微生高は素直だというけれども、それは違う。或る人が微生高にお酢を貰いに行った。自分の家にはなかったから、隣の家にお酢を貰いに行って、それを渡したという。これは正直者とは言わない。

無いものは無いと言えよのに、よその家から貰ったお酢を自分の家にあったような顔をして、いい格好をしようと思ってやっているから正直者とは言えないということです。先ほど伯夷・叔斉の部分で、自然体が良いと言いました。だいたい人間は格好をつけてしまいます。無ければ無い、有れば有ると素直に言える人は素晴らしい。自分自身は素直であるか、正直であるか、自問自答してみればよろしいでしょう。

【二十四】 しいわ こうげん れいしょく すうきょう さきゅうめい これ は きゅう またこれ は子曰く、巧言・令色・足恭なるは、左丘明之を恥ず。丘も亦之を恥ず。
うらみ かく そ ひと とも さきゅうめい これ は きゅう またこれ は

左丘明は昔の賢人で、春秋左氏伝を書いた人です。丘は、孔子のことです。

孔子が言うには、弁舌巧み・愛想がよいが眼は尖っている・むやみに腰が低い。左丘明は、こういう人たちは恥ずかしいと言った。私もまた、こういう人は恥ずかしいと感じている。

腹の中で恨みを隠しながら、友達になってニコニコしている。これは恥ずかしいと左丘明が言っていたけれど、私もまた、そういう人は恥ずかしいし友達にはしなくないと思う。

周りを見渡してみても、こういう人は沢山います。友達にするには、表裏のない人を選ぶと良いなと感じます。

【二十五】 がんえん きろじ しいわ なん おのおのなんじ こころざし い しろいわ顔淵・季路侍す。子曰く、盍ぞ各爾が志を言わざると。子路曰く、願わくは車馬衣裘、朋友と共にし、之を蔽るとも憾むこと無からんと。顔淵曰く、願わくは善に伐ること無く、勞に施ること無からんと。子路曰く、願わくは子の志を聞かんと。子曰く、老者は之を安んぜしめ、朋友は之を信ぜしめ、少者は之を懐かしめんと。
ねが しゃば いきゅう ほうゆう とも これ やぶ うら な がんえんいわ ねが ぜん ぼこ な ろう ぼこ な しろいわ ねが し こころざし き しいわ ろうしゃ これ やす ほうゆう これ しん しょうしゃ これ なつ

孔子と、顔淵と子路という二人の弟子との会話です。

孔子が「お前たちは、これからどういう人間になりたいのか言ってみなさい」と言いました。

子路が「私が希望とするものは、良い馬車に乗って、絹の服や軽くて暖かい狐の毛皮を着たい。そういうものを持っていない友達には共有して、お互いに良い付き合いをしたい。仮に、馬や衣服がボロボロになっても文句を言わない。そういう人間関係でいたい」と言いました。

顔淵は「善行を自慢しない。他人の為に何かしてあげても恩を着せない人間でいたい」と言いました。

子路が、「先生はどうですか」と聞いたので、孔子が答えました。「お年寄りには安心感を与え、楽な暮らしができるようにしてあげたい。友達とはお互いに信じて交際をしたい。子供には懐いてもらって、良い方向に導いていきたい。これが自分の希望である。」

知足

中斎塾フォーラムの基本哲学は「知足」です。中斎塾フォーラムでは、話を聞いていると知らず知らずの間に、ほどほどが良いとか、あまりがつかないでちょうどという気持ちになって戴くことを目的にしています。

常に「足るを知る」とは何だろうと考えるようになるし、困った時に、あまり欲張らなくても良からう、と自然と入ってくれば良いと思っています。

転機 幸福の女神

人生の中の一大転機というものは、今がチャンスだ！ と来ているわけではなくて、チャンスが去って暫く経ってから、あれがそうだったのかと思う。それが普通ですので、ここらへんがポイントだと思います。

「女神の後ろ姿」と書いたのは、幸福の女神は、前髪は黒髪豊かです。女神が向こうから歩いてくる。声をかけたいなと思いつつ、後から追いかけても女神の後ろ髪は無いから掴めない。チャンスは、後からでは捕まえられないということです。

中斎塾フォーラムで今、我々は学んでいますが、転機は色々な形で沢山あると思います。学んでいても沁み込まない人は沢山います。本当に学びたいと思うと、3つチャンスが来ると思います。

一つは、師匠との出会いです。これこそ我が最良の師匠だと思う人に回り逢えるかどうか

かです。私は木内信胤先生が自分の師であると決めて仰ぎました。木内先生との出会いは、先生が群馬県に来られた時に、講演会に出かけて行きました。お会いするまでは、先生の本を読んで、断定した高飛車なものの言い方をする人だという印象を持っていました。話を聞いているうちに魅了されました。話の中身より人格に魅せられて、講演会が終わった瞬間に立ち上がって先生の前に行き、「弟子にして下さい」とお願いしていました。これぞ自分の師だ！ と決めると、無意識のうちに行動に移るものだと私は思っています。本気で師匠が欲しいと思っている人は、そうなると思います。

同じような体験をしたのが、詩吟の先生です。私は五年前に中国に行った時に、詩吟を習いたいと強烈に思いました。帰って来てたまたま出た会合で、坂本坦道先生が請われて詩吟をされました。このチャンスを逸してはなるものかと、すぐさま「弟子にして下さい」とお願いしました。「では、鉄砲洲にいらっしゃい」と言われ、鉄砲洲神社で行われている詩吟を習いに行くようになりました。

覚えたい・習いたい・学びたいと思っていると、目の前に師匠が現れたら思わず動いてしまうという体験を致しました。師匠がいないという人は、本気で求めているからだと思います。

二つ目は人との出会いです。一生涯の友人も、同じように本気で求めると出てくる。

三つ目のチャンスは、素晴らしい本です。これも本気で求めると出てくる。そう考えてよいと思います。

つまり、＜本物＞というのが一つのキーワードです。後から考えると、立ち上がって先生の前に行って声をかけた時が一つのチャンスで、女神をしっかり捕まえたのだと思います。ちょっと考えたり躊躇したりしていると、チャンスはなくなります。思った瞬間に行動することです。

女神を捕まえる時の心構えをご紹介します。柳生家の家訓と言われるものです。

縁に出会って縁に気づかず・・・チャンスが来ても、気がつかない。

縁に気づきて縁を活かせず・・・チャンスに気づくけれども、活かすことができない。

袖触れ合う縁をも活かす・・・女神の後ろ姿です。これがチャンスだと捕まえないと、女神は行ってしまいます。袖触れ合う縁をも活かすことができれば素晴らしい。

ちなみにこの柳生家の家訓ですが、柳生家の縁に繋がる人の話では、こういう家訓は柳生家にはないそうです。一般に流布されていますので、そのまま使えばよいだろうと思っています。

一つのテーマについて、どんどん掘り下げていくことが肝心です。一つのテーマに対して様々な角度から掘り下げると、色々な人が教えてくれます。色々な知恵が入ってきます。それをまた手がかりにして、更に深く掘り下げる。そのうち自分自身の考えが固まります。自分自身の考えが固まると人さまにお話をしてもいいし、人さまから自信をもって教わることができます。人に聞かれて、「知らない」と答えるのは結構勇気が要るものです。知らないことを「知らない」と言えるのは、自分自身の専門分野を持っていて、それだけは誰にも負けないというものがあると、素直に言えるものです。何か一つでも、自分の専門分野を深く掘り下げておく必要があります。

氣になっていること

最近の動きでおもしろいと感じるのは、地方が大分色々な動き方をしています。

大阪の橋下知事は、東京都と同じように、大阪都構想を進めています。名古屋市も杉並区も大分おもしろい動きがあります。

杉並区長の山田宏さんは、日本志民会議という政治団体の中心として活動を始めています。日本志民会議は、松下政経塾の塾頭をされていた上甲さんという方が代表をしています。山田区長は「地方行政のトップは、まず自分の給料を削って、そこから地方行政の改革を進めている。私も給料を削って、それから杉並区政の改革を進めた」と言っていました。＜自分の給料を削らないで人が付いて来るものか＞というのが、地方行政のトップで改革に成功した人たちの共通した思いがあるようです。

そして少し派手なのが、名古屋の河村市長です。議員を半分減らす改革案を出して、総スキャンを食らっています。

議員を削減する・自分の給料を減らす・税金を減額する・・・といった動きが、地方から大分出てきています。これは日本の国も、まんざら捨てたものではないと感じます。こういう地方の芽が国政に繋がってくるようであれば、これは良いと思っています。

我々もとにかく本気で学ぶ、本気で良い仕事をする、本気で学問をしようと思うと、良い循環が始まって、人間的にスケールがどんどん大きくなっていきます。本気で学ぶと、その先は素晴らしい人生が待っていると思いますので、どうぞそのように毎日過ごして戴くことを希望いたします。

本日の講話は終了です。有難うございました。